

あそ 9

2017



カバの目の
漆黒が澄む
水が澄む

秘典

素の筆写



あそ

九月



東京 佐藤 喜孝

ふたり

御目出糖甘露子清白ふたりして
ふたりして蛙の目借りどき首肯
初雛鶴の折目をしっかりと
目白をば化身とおもふ気弱さよ
老人の櫛目整しく日向ぼこ

東京 七郎衛門吉保

夏盛り

ミンミンが一番蟬の異変かな
瑠璃蜥蜴花魁のごと振り返る
水涸れてダム湖の周り蛇の衣
茗荷の子三日つづきの七つ八つ
マッピングされしビルの背涼み船



東京

篠田 純子

夏瘦

夏瘦やおろし大根を添へ餃子
夏瘦やスリット深き黒ドレス
自分より朝顔に先水一杯
蝉しぐれ激しこの雨上がるやも
くらがりに秘密を拾ふ酔芙蓉

石川

定梶じょう

日盛り

強く引くひき潮暑くなりさうで
梅筵とり込み目鼻たそがるる
月見草廃船が地に巨いなり
離水せんばかり白帆へ海南風
日盛りの消火器赤きこと痛む

埼玉

須賀 敏子

スマートホン

水無月や洗濯バサミ劣化せり
炎天や蛭蝶閑かに交はりぬ
両手挙げプールの中へ滑り台
平和なり小さき庭にも蟻のゐて
半夏生いろはにほへととスマートホン

東京

田中 藤穂

投票

目一杯伸ばす関節戻り梅雨
怒りありてゆく投票の暑き道
梅雨しぐれ子ら待つ象のすべり台
ぼろぼろの名簿手にあり合歡の花
銀座柳通り夕焼け靴の音



三重 長崎 桂子

極暑

歩く会緑蔭もなき石の椅子
昼すぎや緑蔭から緑蔭へと
山近し並ぶ空家の青葉闇
脚力に判断力欲し極暑かな
極暑なり夕べの燈明に直願ふ

東京 森 なほ子

あぢさゐ

旅の靴これと定めて梅雨長し
滑り台の思はぬ高さ青嵐
毛布にて覆ひし如き溽暑かな
サザエさん終はり紫陽花まだ見ゆる
照り曇り照りあぢさゐの意志育つ

東京 赤座 典子

旅仕度

屋上の人工芝に子等裸足
またたびの垣に揺れゐる落し物
子を待ちし人に朗報秋近し
晩涼に日数分の飲み葉
旅仕度あれこれ浮ぶ熱帯夜

埼玉 秋川 泉

梅雨そして晴

東京の都議選すんで梅雨の星
わけ知らぬ子もくぐりゆく茅の輪かな
ビキニの子喚声上がる滑り台
おぼつかぬ歩みの猫に鮎与ふ
にび色の雲をはらひて梅雨の月



東京 石森 理和

白桃

大阪の淀川花火ラインに咲く
焼蜀黍ふる里の海引き強し
スマホ程小さき団扇の風よろし
白桃や肘まで果汁したたらせ
瓶の中花後の梔子渦巻く根

埼玉 大日向幸江

絵日記

まつり囃子遠くに聴こえ梅を干す
絵日記にパンダを描く夏休み
遠花火戸を開け猫の出て行きぬ
牛乳を飲んで眠って夏休み
おてだまや小豆は二合半とする

千葉 黒澤 佳子

麦酒

垣根越し裾分けするやラッキョ剥く
新牛蒡気合入れ抜くいと易し
ネクタイを緩めビールの一気飲み
夏痩せね言葉やはらや栄養士
満目のパラソル揃ふ真夏かな



老人は水のなかから目をつかふ

佐藤喜孝

風に乗り芝刈る音や網戸越し

黒澤佳子

右傾化や抜いても抜いても夏の草

七郎衛門吉保

ビル古し屋上にある鴉の巣

篠田純子

明滅の明の永きは勝ち螢

定梶じょう

転車台油のにほひ浅き夏

須賀敏子

えごの花散るや雨読の方丈記

田中藤穂

夏の海あゆむズボンをたくしあげ

長崎桂子

古代蓮青い蜻蛉がきて止まる

早崎泰江

待つことが上手になって落煮をり

森なほ子

根津邸の縁去りがたし閑古鳥、赤座典子

赤座典子

文をかくはじまりは雨みなづきの

秋川 泉

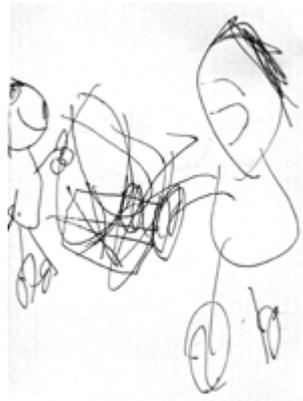
梅拾ふどうぞと言はれんぎもして

石森理和

吉左右を待ってをりたり鶴

大日向幸江

喜孝抄



東電と秋山ちえ子花子の忌

佐藤喜孝

TBSラジオ「秋山ちえ子の談話室」は二〇〇二年十月四日まで総放送回数は一二五二回の四十五年間続いた長寿番組。秋山ちえ子さんは、二〇一六年四月六日、九十九歳で旅立たれた。象の花子は同年五月二十六日に六十九歳で死んだ。どちらも平和の象徴的存在の様に私は思う。秋山さんは毎年八月十五日「かわいそうなぞう」を朗読されていた。大地震・大津波・そして原発事故。日本中を恐怖のどん底に落とし入れた東電がその番組のスポンサーであった。

このひと続きの物語を私はこの句から一挙に思い出す事が出来た。

ちようどこの『平和の象徴』が消えた今、『平和』ととても遠い道を日本は歩み出そうとしている。(泉)

五月雨や声押し殺し鳴く鳥

大日向幸江

降り続く雨に濡れて鳥が一羽、くぐもった低い声で鳴いている。どこか人間的なその声。「押し殺し」の表現がいいですね。長雨を託っているのか、鳥と生まれたことを嘆いているのか。(なほ子)

菜の花や遠目に人のてんと

黒澤佳子

一面の菜の花畑の道を作者は散策されている。その畑のむこうに三々五々この春の風景を楽しんでいる人が見える。何んともどかな

ゆつたりとした気持ちの味わえる句です。(泉)

立夏かな玻璃の器に茶を立てり

七郎衛門吉保

立夏は例年五月七日頃でしょうか。この季節のきりつとして力強い感じが大好きです。実際はもう少し晩春の気分を味わわせてほしい、といつも思うのですが。さあ夏が来た、涼しげな硝子の器を選び出し、お茶を立てる。味わいも一入でしょうね。季節に敏感に、生活を丁寧に味わっておられる作者、羨ましいです。(なほ子)

手押し車に園児六人風青し

篠田純子

一台の手押し車に六人の幼児！大きな手押し車なんですね。保育園のまだ幼い子供たち、賑やかな片言のおしゃべり？それとも黙っておとなしく？どちらも可愛い！一人で六人の幼児をお散歩はムリ、それを可能にした素晴らしい手

押し車です。若葉風や青葉風ではなんとなく手垢がついた感じで幼児には合わない気がします。が、風青しななら子供たちにぴったりの新鮮さがあるように思います。(なほ子)

ものなべて旧りゆき今の虻光る

定権じょう

ものは全て古くなります、当たり前ですが。古くなってもものは残ります。私は古民家のような場所がうかびました。旧るの代表のようなところに一匹の虻が飛んできます。唯一の「いま」として光りながら。人間も虻と同じく「今」を光り、旧りゆき、消えていきます。「生」の代表選手として選ばれた「虻」が良かったと思います。(なほ)

急変の空に向かって黒揚羽

須賀 敏子

光景が鮮やかに見えます。さつきまで青かつ

た空がみるみる黒雲に覆われていき、その雲に呼び寄せられるように黒揚羽が一頭舞い上がってゆく。作者だけが捉えた幻想的な光景。ところで、この頃普通の黄揚羽より黒揚羽のほうがよく見られるような気がするのですが……私の近辺だけなのでしょうか？（なほ子）

柿若葉大声のまま逝かれけり

田中藤穂

長く病んで逝かれる場合は、声も衰え小さくなってしまうでしょう。声の大きなその方は、ぼっくり逝かれたのでしょうか。今朝はあんなにお元気で、いつものように大きな声で挨拶されたのにと、ご近所の人たち。あの声がもう聞けないのね、と寂しい作者です。柿若葉が新しい緑を広げています。改めて自然には終わりが無いことをしみじみ思います。（なほ子）

葉桜の道は朝夕安否問ふ

長崎桂子

にぎやかな花見の頃を過ぎて日常がもどり、地域に住む方々の行き交う道。「お元気ですか」「お陰様で」。「お出かけですか」「ちよっと病院へ」「まあお大事にね」。互いの無事を気遣うあたたかい言葉が聞こえます。（泉）

子らの声絶えたる里の鯉幟

森なほ子

昔は、村中に子供達の走り廻る元気な声が聞こえたことでしょう。それが今、ただ一つ鯉幟が。あゝあの家には子供が居る。作者はほっとすると共に、ふと淋しい思いにかくれたのでしょうか。（泉）

兄妹飽きず飛込む夏布団

赤座典子

小さな兄妹が、今出したばかりの夏布団がめ

ずらしくて、そのふわふわの心地よさに何度も何度も飛び込んで、その感触を楽しんでいる。にぎやかで楽しい声がこの句から沢山聞こえて来ました。（泉）

日翳りてヒヤシンスの香流れをり

秋川 泉

流れるような調べです。「ひ」と「か」、「り」の音の繰り返しを読んで心地よいながれをつくっています。内容も調べにふさわしく、さりげなく美しいのです。小夜曲のように……。（なほ子）

目覚ましは驚しばし聞き続け

石森理和

春を告げる鶯の声で目覚めた作者。この鶯は初鳴きの頃でしょうか。それとも、もう上達した鳴き声でしょうか。とても心地良く、夢心地で床の中でその声を楽しみましたでしょう。（泉）

夏蝶のみるみる空の彼方まで

井上石動

蝶は蠱惑的な不思議な感触のする昆虫。しかしその蝶はゆつくりと翅を休ませることなく、ひらひらと舞い上がって見えなくなりました。こう言う事本当にありますね。美しいので良く観たかったのに……。（泉）



比来披見

ホトトギス 八月号
 山を去るとき蝸に心置く
 この空もこの川風も秋近
 沖 八月号
 逆吊りのドライブフラワー避暑期来る
 槐 八月号
 接木終へはや一木となつてみし
 馬酔木 八月号
 碑に波郷の文字の涼しさよ
 風土 八月号
 月の夜の玉葱畝に浮かれ出づ
 京鹿子 八月号
 その話蒸し返すとは蚊帳を吊る
 六花 八月号
 名を聞けば姫待宵となりのけり
 万象 八月号
 青空を正面にして椽の花
 能登七尾柿渋染の夏のれん
 春燈 八月号
 藤椅子に師の忌近しと思ふ日や
 鴨 八月号
 苔青し結界石に綱十字
 空 73号
 鳴引きし湖に夕波走りけり

稲畑 汀子
 稲畑廣太郎
 能村 研三
 高橋 将夫
 徳田千鶴子
 南 うみを
 鈴鹿 呂仁
 山田 八甲
 大坪 景章
 内海 良太
 安立 公彦
 高橋 道子
 柴田佐知子



喜孝抄

末黒野 八月号
 老鶯や筆の穂先のままならず
 潮風や尺を拳げたる松の芯
 雲の峰 八月号
 翁碑へ炎天炎地ひた歩く
 こだま 七月号
 甚平着て馬耳東風を決めこめり
 こだま 八月号
 洗ひざらしの星空の贅山荘に
 集 64号
 コロッケを買つて菊坂うららけし
 寶珠花釘
 松明を灯して作る春の闇
 たつぷりと暗き近江のかいつむり
 油つ気帯びて懶い春の雲
 花ふぶき顔の右側左側
 永き日や午前は昨日午後は今日
 結末が発端用意する五月
 向日葵は大人気のない花咲かす
 瞬間の隙間にすべりひゆ生える
 ひるがほを昼顔と書く眠気覚め
 鉛筆を砂丘に刺せる晩夏かな
 臆病神も貧乏神も神無月
 寶珠花街道脇の豎子溜

小川 玉泉
 松本三千夫
 朝妻 力
 松林 尚志
 松林 尚志
 大山 夏子
 高橋 龍

あをキーワード俳句辞典(なかーなが)

仲間
 三様の仲間集へる雛懷石
 八十路なる我も仲間の祝箸
 朝北風に体操仲間肩を組み
 散歩道銀杏拾ひに仲間入り
 五右衛門は忍者の仲間曼殊沙華
 仲見世
 仲見世の賑はひのなか玉ラムネ
 仲見世や日向ぼこするこちら側
 人の波仲見世通り北風知らず
 着ぶくれて仲見世につと吸ひこまる
 仲見世や提灯つらね月冴ゆる
 十二月混む仲見世の善哉屋
 中指
 あたためてもらふ中指よさむかな
 半ら
 きぎはしの半らにふつと今年竹
 勿かれ
 松明や猿を決め込むこと勿れ
 なかんづく
 なかんづく穀象の鼻うすぐらき
 なかんづく子牛のまはり風光る

赤座 典子
 森山のりこ
 大日向幸江
 齊藤 裕子
 七郎衛門吉保
 芝 尚子
 赤座 典子
 石森 理和
 東 亜 未
 藤野 寿子
 田中 藤穂
 篠田 純子
 佐藤 恭子
 赤座 典子
 竹内 弘子
 定梶じょう

春めきて鴉の色のなかんづく
 なかんづく杳きところよ葭簣裏
 なかんづく肉やの燈し雪ゆふべ
 長雨
 長雨にシャネルの香りつけにけり
 容赦なく秋の長雨老いを打つ
 長雨や栗の渋皮煮にトライ
 長居
 長居して友に送られ今日の月
 香り満つ花桐の下長居して
 四五年はこの世に長居豆を撒く
 吹雪止み函館山に長居せり
 長生き
 長生きの金魚跳ねざま鯉に似し
 梅雨晴れ間長生きをして長電話
 母よりも長生きをして花吹雪
 一畝に茄子と蕃茄と母長生き
 長生きの呪文のやうに野遊びす
 長椅子
 柿若葉長椅子にふとまどろめる
 永井荷風
 六区正月永井荷風に似たる人

芝 尚子
 佐藤 喜孝
 定梶じょう
 河合 笑子
 鈴木多枝子
 竹内 弘子
 齊藤 裕子
 長崎 桂子
 堀内 一郎
 赤座 典子
 早崎 泰江
 芝 尚子
 須賀 敏子
 定梶じょう
 大日向幸江
 田中 藤穂
 篠田 純子



佐藤喜孝

赤座典子

阿りて付度といふ栗の花
流木の流木に乗る梅雨出水
炎天やせつせと剥がす屋根瓦
足音に慌てて起きる三尺寝
夏祭片付き常の広小路

流木の流木に乗る梅雨出水

川の氾濫を今年もテレビで幾たび見たことだらうか。画面からでもその力の恐ろしさが分かる。こすれあつて樹皮が剥け白々とした流木が折り重なつてゐる出水の後は、その激しさを物語つてゐる。掲句はその光景の一部を切り取り冗長にならずに表現してゐる。この切り取られた「流木の流木に乗る」を読むと出水のエネルギーが見事に再現される。俳句の持つてゐる力を信じた一句である。

定梶しよう

散髪の椅子にねてゐる日雷
国籍が日本で住所合歓の花
イスラムのこと枇杷包む新聞に
雷落ちて鎖き止まぬ張子の虎
朝曇る燃えないごみの収集日

散髪の椅子にねてゐる日雷

日本人は他の国の人と比べ電車などでよく居眠りをすると云はれる。それが本当かは知らないが、わたしもあの眠気には負ける。さういへば床屋の椅子が倒されて蒸しタオルを乗せられ、乳白色の光の中でうとうととなる。西部劇では床屋の腹に拳銃を突きつけて髭を剃らしてゐた場面があつたかとおもふ。近くではなささうな「日雷」が見事なはたらきをしてゐる。

須賀敏子

凱旋門若き大統領とパリー祭
朝鮮に凌霄の花咲いてゐるか
夏深し帯広三十七度となりけり

夏深し帯広三十七度となりけり

地球温暖化と云はれて久しい。豪雨・竜巻・雹・豪雪・そして猛暑と天候に関するニュースに暇がない。東京より北海道の方が暑い日があり驚いた。それにつれ海も陸も生物が棲みやすい場所を求めて移動してゐるやうだ。北海道の夏の気温を調べてみた。昨年の最高気温は上富良野の33.8度。今年は掲句のように帯広・滝上で37.1度。地元の人も旅行者も動植物も驚かれたことと思ふ。

井上石動

向日葵や蹴つて再起の脱水機
羅の迷ひこんだり魔都新宿
その朝の蓮の花は満てりけり
路地ははや試し踊りの囃かな
望まれてポーズの形もされば阿波

その朝の蓮の花は満てりけり

「その朝」とはいつもの朝のことではない。今日何かがあるといふ朝であり、昨日何かがあつたといふ朝である。この句からは惜しみつつもこの世の人生を全うした人へ送られた句におもへる。それにしても極楽のやうな景である。

篠田純子

片陰を人と行き交ひぶつかりぬ
「考へる人」の巻き爪像灼くる
行き合ひの雲へ流線子規球場

石森理和

待つ人の必ずゐると青葡萄
芳香に引き寄せらるる東洋蘭
百年の母兄ここへ東洋蘭
赤白黄うたげじゃ宴仙人掌
向日葵を小さき花壇に消防署

向日葵を小さき花壇に消防署

消防署と云ふから立派な建物であらう。そこに不似合

片陰を人で行き交ひぶつかりぬ

真夏の太陽が真上から降り注ぐ熱線。物の裾に縮こまった陰を拾って歩く人。向こうから来る人と譲り合ふこともせずぶつかってしまった。これに近いことはよく経験する。白線で区切られた人ひとり分の幅の歩道。対面した時大方わたしが負けて車道側に出る。近頃は諦めて早目に道路の反対側に移る。どちらかが譲らなければしょうがないが、線を引いただけの歩道も日本らしいといへばいい。「江戸しぐさ」といふものがあり、傘かしげ・肩引き・時泥棒……などといふマナーがあったさうだ。

田中藤穂

魂迎へ香も煙もなきお線香
つやややく柘榴の萼散り敷ける
遠波に乗りくる何か夏の月
帰省待つ母へ多忙と子のメール
青簾通す夕映え食卓に

魂迎へ香も煙もなきお線香

朝起きると先づ洗顔をしお線香を炷く。スーとお線香から一直線に天上に向かつて昇つてゆく煙を見るのは気分がよい。少し乱れるのもまた美しい。空気の動きだと分かっているが、何か向こうから語りかけているところになる。しばらく眺めてみると鼻の悪いわたしにも芳香が届く。ところが掲句のやうに「香も煙もなき」線香もある。なにか伝へ合へる物がなく物足りない。魂迎のときは香も煙もある線香を炷きたい。

長崎桂子

簾掛け落着く居間となりになり
蝉の殻輪と葉と幹にしがみつく
台風や小さき生き物土間に来る
台風の浜防波堤は交通網
虫すだく今宵華やぎ賑はしき

台風や小さき生き物土間に来る

台風の威を避けるためかわが家の土間に来る小さな生

き物。一茶の雀や蛙と違ひもつと小さな生き物であらうか。その小さな生き物に目を止めてゐる。優しい作者の眼差しをおもふとこちらも和んでくる。作者は小動物が出入りできる土間のある生活を楽しまれてゐる。

大日向幸江

離れ猿今を盛りの枇杷の木に
波一枚一枚ごとに乗るサーファー
岩牡蠣のつるりと喉のこそばゆく
風鈴や一泊旅行の先先に
日向臭き梨の実一つ転がりぬ

波一枚一枚ごとに乗るサーファー

大勢のサーフィンを楽しむ人が海に出てゐる。「波一枚一枚ごとに」でよくわかる。こんなに混雑したら怪我をしないかと余計なことを考へてしまった。「梨の実の匂」には梨から日向臭さを覚えるといふいつもの作者の鋭い感覚がある。「一つ」「転がりぬ」がその感覚の佳さを生かし切れてゐないのが惜しまれる。

秋川泉

川風や夫と味はふ鱧の味
大鰻さばく手元のあやふけれ
土産にと蝦蛄の入りたる網を受く
網の蝦蛄はねる強さに手をゆるめ
竹莢の飛ぶ額ぬぐひて鱒さばく

川風や夫と味はふ鱧の味

一年前のわたしなら通りすぎた句である。平凡で誰もが抱く思ひである。しかしその月並みをこうして眺めてみると捨てがたい地味が湧いてくる。「川風」が爽やかで心地良い。夫婦は男女の関係とは違ふ夫婦の関係(?)。一期一会といふ事であらう。

七郎衛門吉保

若武者の連勝記録梅雨晴れ間
監視さる日の始まりし溽暑かな
ゲリラ超え神出鬼没の出水川
西海道白雨流木地に鯰
きのう黒けふ黄揚羽の神楽舞

佐藤喜孝著

青宮の貞

を読む



佐藤 恭子



摘み草に盗みこころの少しあり
天空海濶摘みあましをく芹嫁菜

春の野原にでかけると誰しも子供の頃のことを思い出され草を摘んでみたくなる。畦などには若菜がそこいら中にそれこそ摘みきれないほどの量と種類がある。春の七草の芹薺御形繁縷仏の座スズナ蘿蔔というように。秋には秋の七草というものがあるが春のように食べられそうもない。

道の辺に自然にはえてきたものだから特定の所有者がいるわけでもないが、何となく「採ってもいいかな」と

思わないでもない。自分のものではないので盗みこころとはうまく言えている。こんな気持ちを懐かせるところに摘み草がより楽しくなる所以であろうか。

二句目は一句目と違い天空海濶と先ず言っている。人の度量の広いことを指しているのだが、自分のことではないだろう。とすると自分が来る前に摘み草をしていった人が全部摘んでいかないで残っていた気配があつたのだろうか。そのことを天空海濶と言ひ芹嫁菜が残っていた。嫁という言葉にはあまり明るいイメージがないがこの句の場合は明るくひびきが良い。

なはとびで春の天地を往き來する

ひとりで縄跳びをするも良し、両側に縄を持つてもらつてとぶこともある。人間とび上がった時と自分の背丈で物を見たときの違いは少しでも高いところから同じものを見ればよくわかる。まるで違う世界がひろがるものである。最近まで若い人の間で流行っていた厚底靴を履きはじめるともう低い靴は履けなくなつてしまつたという話をテレビで見た。

春ともなると地面には色々の草が芽を持ち花を咲かせるとび上がった拍子に何が見えるか。もしかしたら塀の中にいる恋猫が見えるかも知れない。春の天地と言っているのだから春にしかのぞくことが出来ないいろいろのことであろうかと思う。往き来しているうちに天と地の境もなくなつてしまひ浮遊するものになつたのだらうか。それにしても春の天地だからよいのであつて夏でも冬でもこの楽しさは味わえないであらう。

泳げなくともへいきのへうや田螺かな

田螺を見たことがなかつたので数年前、東北へ里帰り

をした方に無理を言つて田圃から持つて帰つてきていた。いそいそと熱帯魚を飼つていたときの水槽を出してきて放した。生き物を飼うにはなかなか勇氣がいる。飼つてしまうと責任があるし、いつの間にか自分の分身のようになるからだ。しかし毎日が楽しい。

水中で生息している生き物は泳ぎができないと生きてはいけない。だいたい生き物は泳ぎながら息づいている。ところが田螺は泳がないのだ。暇が出来ると水槽の前でのぞき込むようになった。水槽の壁面にピツタリくつついているか、水底に居るか入れている石に吸いつている。時に移動したくなつたのか動き始める。水槽の壁からぼとりと、岩の上から下へ落ちる。水底に着くと徐に足？を出して自分の好みのところ移動を開始する。水の中で生活するものにとつて泳げないということは致命的となるが、田螺は泳がない。平気でいられるというのは泳げないのではなく泳がないのだ。

他の人に出ることが自分出来ないことが沢山ある。そんなこと何のこともないよ、人との優劣に一喜一憂するのは私の歳になつたらもうやめようと「泳げなくとも」ではなく「泳がなくなるとも」この句を読んで思った。

ばらまきし餌の泳ぎ出す春の水

金魚や熱帯魚を飼っている人たちにはよく分かるとおもうが、餌を水槽の上から落としてゆくと水中に入った途端に餌はそれぞれ好き勝手に違う動きをする。大ききや水に入った角度によっての事だろうがその動きを泳ぎ出すと言っている。この泳ぎ出すという一語によって春のあたたかくなってきた水、また春のうきうき感が十分に伝わってきて春の水でなければならぬことがよく分かる。また熱帯魚には生き餌を使う。狭いところに押し込まれていた生き物は、突然目の前にひろびろとした水に放たれた。途端生きる本能が呼び覚まされ泳ぎ出す。この場合も春の水という季語でなければ水の中でつかの間と分らないながらも生きる喜びを味わっている生き物が生きてこない。せまい水槽の中でも「春の水」の季語によっていきいきと餌の動きがよみとれる。

母の日の昔噺の末は長者

私達の親は多かれ少なかれ戦争に関わりがあった。関わらせられたと言っている。青春時代、または赤ん坊か

治水碑の後の畦を塗りにはり
船に来て再び春を惜みけり
本戸閉めて牡丹の風をなげり
夕秋や夾多ばかりなる島の畑
城壁に遊ぶ鶏や出水晴
窓下に山水走る蚊帳かな
瀧しぶきつづれる簾捲きにけり
冷し風さげて石階上りけり

船の影次第に近し金魚玉
香露深き蓮を見てある蛙生かな
父の忌や花未かなる池の蓮
地をすつて水に浮びし一葉かな
瓜の店西風提灯点しあり
仲秋の昔より飛べる蝶々かな
ともしびや二百十日の火城あまた
月の蟲鳴き現はれし障子かな

ら子供に成長する時期だったかも知れない。そんななかを生き抜いてきた人たちである。一部の人たちを除いては、皆それぞれに何らかの苦勞を背負つてきている。人間年をとってくると苦勞したことも懐かしく楽しい話すのである。

そんなお母さんの話を聞いているうちに何処からか良い人が現れて遺産の相続人になつたりする。裕福な暮らしをしている人にはよく分からない話であるが、色々なことで苦勞をしている人にはよく分かる。そんなことが現実にくるような錯覚に陥りどこからか王子様がいつかは現れるというものだ。現実味のないしかし切実な思いである。このような句に出会うと私が子供の頃になくなつた母を思出す。物があふれている今と違って、青春期は戦争であった。

少女期の話の聞けずじまいだった。

廣前雨あがりたる蜻蛉かな
みともしの下闇めぐる秋蚊かな
門川や筋ひ賑はふ年夏舟
稲車迎へに出て押しにけり
日々来る鳥い美しき木の實かな
出勤に早き菊園歩まけり
鹿遊ぶ渚に看まし輕舸かな
まはしに干せる根梢や神の留守

世落葉が龍かつしままに拜みけり
道問ひしままに憩へる落葉かな
丈いなる日昃りの來ぬ枯木道
青々と難所の山の眠りたる
聞きたれぬ船言傳や夕千鳥
張りだての障子の内に灯りけり
履き替へしあらじくべたる梵火かな
餘病まがあたり難き懷爐かな

あをの発行日はあとがきを書いた日にしてゐる。遅れに遅れ焦つてゐる数字である。創刊以来佐藤恭子が打ち込み・会計・送付と引き受けてくれていた。一年程ひとりて出来るかとやってみた。ところが遅くなるばかりで取り戻せない。そこで皆様に左記の募集、いやお願ひを致します。

募集

作品集とはしだて集の作品の打ち込みをお願いします。手順は月末に集まった原稿を郵送します。分からない字、打ち込めない字は「■」で済ませて下さい。二週間程でメールにて打ち込み結果を送信して下さい。志願者が複数居られた時は輪番制でお願い致します。よろしくお願いします。

あとがき

わたしは何十年と顔を洗はなかつた。物ぐさではない、理由はある。ある皮膚科医が人間顔など洗はなくとも良い。体などごしごし洗つてはいけない。実践している医者がいふのだから間違ひは

ない……と。わたしの都合もよいのでその日からその説に乗ってしまった。子供の頃は素直な子だったので、アルマイトかセルロイドの洗面器に、冬は湯たんぼの冷めかかった湯でちゃんと洗つた。目の性が悪かったのか目を覚ますと目脂が睫毛に絡みついて目が明けられなかつたさうだ。せうがないと睫毛を切られてしまった。睫毛はやはり大切に眩しさうに目をしばたいてゐたとおぼさんが嬉しさうに話してゐた。《統》 〈喜孝〉

二〇一七年九月号

発行日 九月二十九日
発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244
ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）